

石川県能登半島地震その後



令和6年元日に石川県能登地方を襲った震災により、大規模な復旧作業を余儀なくされ、景気回復への道りはまだまだ先になりそうではあるものの、災害を免れた石川県内各地において様々な催しが行われ、復興への足がかりとなるような試みが行われている。

■「e-messe kanazawa 2024 いしかわ情報システムフェア」開催

震災から間もない2024年5月16日(木)～18日(土)の3日間、石川県産業展示館1号館(金沢市袋島町南193番)において、日本海側・北陸地方最大のICTのビジネスショーである「e-messe kanazawa 2024(第39回いしかわ情報システムフェア)」が開催された。

本年の開催テーマは『繋げる願い 広がる

未来ICTで作る新しい世界』であり、開催趣旨は、ICT関連企業によるICT/IoT利活用の促進、新たなビジネス提案、新製品等の展示を通して、地域の情報化推進に寄与することを目的とし、最新のICT(情報通信技術)、IoT・AIや5Gなどの先端ビジネスソリューションの展示・紹介をはじめ、各種イベントやセミナーが開催された。



2階フロアにて行われた『eスポーツエキスポ2024』

■おまもりぶくる■

2023年10月に東京ビッグサイトで行われた危機管理産業展にて発表し、受注生産を開始し、本展でも注目的となった災害時用寝袋兼敷物「おまもりぶくる」。

この製品を発表して3ヵ月にも満たないうちに発生した能登の地震であるが、防災敷物企画・開発を行ったのが石川県七尾市の『ほっと。松本』(代表:松本 隆氏)である。

関東大震災以来一世紀変わっていない“避難所の盲点”に着目し、折り紙を応用し、敷くだけでゾーニングまで完了する、災害時用寝袋兼敷物「おまもりぶくる」を考案したという。

コロナ禍は避難所の光景を変えたと思わ



危機管理産業展2023では8人分の仕切りスペースが展示された

れがちであるが、相変わらず整然と並ぶ段ボールベッドやテントが主流であり、それらは前もって備えられたもの。とっさの避難時に繰り返されたのは、これまでと同様に避難者にとって極めて不都合な状態である。特に令和になってからの異常気象が常態化し、国内ではますます「想定外の避難」が増加した。

昨今は、優秀な防災用品が登場しているものの、“避難者が入った後で”なんとかしよう／できる…は無理。関東大震災以来、一世紀変わらぬ未だ気づかれぬ“盲点”を解決し、72時間に関連死を防ぎたいという想いで開発したという製品である。

避難所となる施設内に備蓄しておくことで、陣取り合戦になりがちな避難所をいち早く区分けし、女性や高齢者のゾーニングや、通路を確保できる。厚さは4mmであるが、ブルーシートに比べて保温性が高いことも確認し、寝袋としても使えるようにしたという。

「おまもりぶくる」®の7つの特徴。

①スピード:体育館一面(約500㎡)120人分敷くのに、僅か2.5分②手軽さ:子供

DX(デジタルトランスフォーメーション)の推進や新しい日常における働き方の推進を図っていくうえで、ICTの役割が益々大きくなっていることを踏まえ、本フェアは「新製品のPR」、「新たなパートナーづくり」、そして「ビジネスチャンスの発掘」などの絶好の機会と考えている。との主催者側の見解がなされている。

また、同館2階においては、『eスポーツエキスポ2024』が行われたほか、隣接する石川県産業展示館2号館では『ビジネス創造フェアいしかわ2024』、同3号館では『MEX金沢2024(第60回機械工業見本市金沢)』が開催された。

その中で、震災を予言していたかのような「おまもりぶくる」というユニークな製品の紹介が行われていた。



本展では、シミズシンデックブースにて紹介した

から大人まで誰でも簡単、広げるだけ。自治体職員の手を借りなくてもその場にいる人で対応可能。③コンパクト:省スペース:専用台車1台で180人分。ブルーシート(敷布)や毛布(上掛け)と同じく、コンパクトに施設内に保管できる。④ゾーニング:敷き込み完了=通路確保とゾーニングも完了。人数把握と名簿作成が容易になる。⑤災害弱者対策:敷くと同時に、女性専用/高齢者/障害のある方専用のゾーンを設けられる。⑥広さ:一区画1.62畳(2.64㎡)。「スフィア基準」の75%を確保。⑦保温性・クッション性:厚さ4mmのクッション入りで下からの冷気を軽減。

*詳しくはこちら

▶<https://hot-matsumoto.com>



■ 道の駅めぐみ白山において白山の旅カレンダーを展示

8月30日から9月8日に、(株)サンビジョンの主催にて、地元の写真家・イラストレーターであるクロスリバーあきこさんとフォトグラファーの山口省一さんが、白山の旅カレンダーと題し、四季折々のおすすめスポットをイラストと写真を合成した新しい作品で紹介した。

展示作品は、クロスリバーあきこ氏が描いた、「ミリー&ミー」と言う猫のキャラクターを中心に描いたウェルカムボード、カレンダー、そして、絵本等を制作している。昨年は、東京都美術館で開催された東京展に絵本の作品を出展しており、本年も、「第50回美術の祭典記念展」に絵本を出展する予定とのこと。

『クロスリバーとネーミングをした理由は、色々な事にチャレンジしてきたという意味からです。』との事。

また、本展にて紹介した作品は、2025年のカレンダーになる予定とのこと。

主催者のコメントにて以下のように述べられている。

『このたび白山市の協力を得て、同市をテーマに写真家山口省一氏との共同でコラボ作品にし、2025年カレンダーとして仕上げました。白山市に住む人々に親しみと癒しを感じていただき、豊かな生活に少しでもお役に立てれば幸せに存じます。また、同地を訪れる方々にその風景の美しさをご紹介できればこれに勝る喜びはありません。』

作者：イラストレーター クロスリバーあきこ

金城短期大学美術学科卒

作書：フォトグラファー 山口省一

(株)EIZO に長年勤務をして、グラフィックスの企画で、その能力を発揮しました。現在は、会社を設立して、グラフィックス関係のセミナーの開催を行ったり、金沢美術工芸大学の非常勤講師を務めている。

主催：株式会社サンビジョン

問い合わせ先 (株)サンビジョン

Eメール：yamamoto@sun-vision.jp



■ 道の駅めぐみ白山において被災地の傷痕のパネル展示

能登半島地震の被災地の様子などをまとめたパネル展「令和6年能登半島地震から半年〜」が7月19日から28日に、白山市宮丸町の道の駅めぐみ白山で行われた。被災地に残る傷痕の写真や日頃からできる防災の取り組みについてまとめている。

展示は、市災害ボランティアコーディネーター会や県防災活動アドバイザーなどが実施。元日の地震により倒壊した家屋や避難所に身を寄せる人々、隆起したマンホールなどの被害状況、被災地でのボランティア活動の様子など、1〜7月に会員らが撮影した写真を中心に約70枚を展示した。2022年と23年に珠洲市で震度6弱〜6強を観測した地震被害の写真展示も行われた。

このほか「家族で連絡方法を確認しておく」「普段から近所と互いに声をかけ合う」「自分の住んでいる地域の防災マップの確認」など日頃からできる災害への備えをパネルで紹介している。

なお、同会代表の明正晋一さんは「能登が大変なことになっている。展示をきっかけに多くの人に災害への備えについてもう一



石川県白山市宮丸町にある道の駅「めぐみ白山」

度考え直してもらいたい」と話していたという。

■記事：中日新聞社WEB サイト

<https://www.chunichi.co.jp/article/930252>

